

農薬栽培から無農薬栽培へ

中田 本日はよろしくお願ひします。山澤さんはハーブ研究所の所長であり、無農薬栽培を行いながら各地の伝承野菜の研究もしていると聞きました。元々は農業エンジニアだそうですね。

山澤 はい、そうです。今から五十年くらい前は農業が発展途上で、技術者の要請も多かったからね。

中田 五十年前というと、いつ頃ですか。

山澤 オレが二十歳すぎあたりだから、昭和四十二年頃かな。やつとモーターゼーションになって、農業も機械化しようという時代。

中田 昭和四十二年ということは、私が生まれてしばらくしてからです。時代は高度経済成長のまっただ中です。モーターゼーションがどんどん発達している頃でした。

山澤 だけど、農業はまだまだ発展していません。地盤整備っていつて、平らにはしたけど、それに対するフォロワーがなかった。それで、国がかなり金を使って大型機械の効率化をはかったわけ。そんときにオレみたいなのが庄内さあ派遣されたんだ。

中田 そこで何をされたのですか。

山澤 農薬の使い方とか、機械の使い方とか、農業の指導をした。

中田 農協に所属して？

山澤 いや。オレらはフリーで、農協団体からの要請で行ったの。エンジンアが一番求められた時代だったからね。それまで農業は農薬も機械もなかったから大変だったんだよ。

草は生え放題で。だけど、除草剤を使ったら草が一本も生えてこなくなった。それは恐ろしかったよ。

中田 農薬散布の指導もしたのですか。

山澤 昔の農薬は濃度も濃かったから薄めねばなんなくて、希釈の仕方を教えた。実際にやるのは農家の人だけでもさ。あんな危険なもの、誰も触りたくねえよ。

中田 その危険な農薬のおかげで、これまでの苦勞が劇的に変わったわけですね。

山澤 そう。虫もこないよ。今まですごい苦勞してたのが、ふつと消えちゃうんだから、なんかいいことやつたみたいになるのよ。たつた十年くらいで一変してさ。農業者の人口も増えたしね。だから、間違つてはいないの。世界の動向がそうだったし、一番の文明は食べ物なんだから。第一次産業っていうくらいだから。第一次産業を無視すつと、最終的に文明は滅びるんだよ。

中田 当然、指導しているときは農業に疑いは持つていなかったですよ。

山澤 まったく持つてない。だって、いい結果が出るんだもの。虫もつかないし、見た目もきれいになるしね。技術屋のオレが技術はすごいって思うくらいだから、誰も疑う人なんていないよ。

中田 今のような研究をしようと思つたきっかけはなんですか。

山澤 オレの子供がアトピーになつちやつたの。五歳くらいだったかな。オレはなんにも

ならないのに、なんで子供がつて。仕事で農薬触つてると、いくらちゃんと手を洗つても、その手で触れたら子供には影響があるのかもしれないと思つてね。それで農薬を使う仕事は辞めたの。

中田 当時はアトピーという言葉もなかったでしょう。

山澤 うん。少なかった。原因はわかんないのに、ステロイドを使うと治つちゃうの。おかしい話でしょう？ お医者さん行くと「はい軟膏」つてステロイドをくれてさ。これはおかしいと思つたね。

中田 子供のアトピーが原因で農薬を疑い始めたのですか。

山澤 そう。なんで？ つて。

中田 五歳になつて突然、症状が現れたのですか。最初はどんな感じでしたか。

山澤 まずは足から症状が出た。オレは学者じゃないけど、仕事から植物をじっくり見ているからさ、子供のこともよく見てたの。するところとか見えない部分ばかり症状が現れてよ。表に出てつこは出ないの。顔とか。不思議だなつて思つた。

中田 表面上、何も問題がなければ健康な子供と変わりませぬね。

山澤 だけども、一番問題なのは、アトピーでは死なないけども心が傷つてつてこと。うちの子供は学校で体重測定なんかがあると、「おばあちゃん、おなかがいい」つて言う

の。服ぬぎたくねえもんだからさ。休ませてあげたくても、ばあちゃんが「また嘘ついて」つて言うわけ。でも、嘘じゃねえんだ。恥ずかしいからお腹が痛くなる。心が傷ついているつてことだよ。

中田 どんな対処をしていたのですか。

山澤 いろいろなことを試したよ。肌に触れるものはぜんぶ木綿のものにして、固形石鹸で手洗いしたり。アトピーの子をもつお母さんはとつても大変なんです。肌着や服は蛍光剤が入つていない固形洗剤で手洗いしなきゃいけない。だけど、それでも治らなかつた。あらゆることをやつてみたけどダメだった。

中田 それでも皮膚科に行けばステロイド剤を処方されるだけなのですか。

山澤 だけど、オレはステロイドつてのがどういうものか知つてたから。即効性があるつてことも。三日くらいできれいになくなつちやうつて、それはおかしいもの。

中田 しかし、症状も治まれば子供も楽になつて嫌な思いもしなくてすむとは思わなかつたのですか。

山澤 思わないよ。作用があれば副作用がある。それは農薬を使つてつから、よくわかるんだ。良い物は何かを失つてんだよ。人間、何かを持つてば何かを失うつてことに、そのときやつと気づいたの。それまでは気づかなかつたもん。

中田 やはり農薬が原因だったのですか。

山澤 農薬しかないと思つた。それに、うち

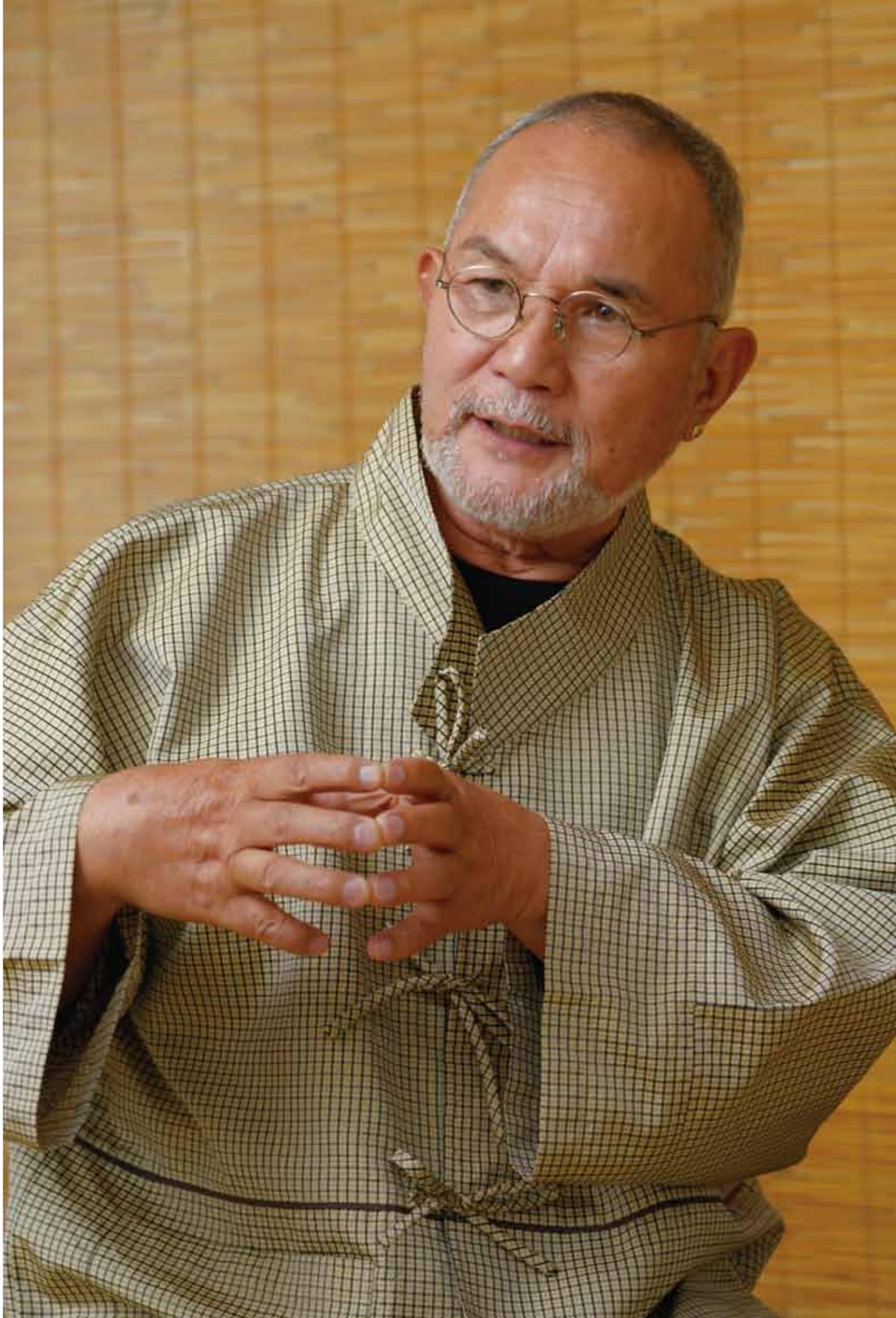
で花の栽培をしている人は、きまつて体壊すよ。花つて野菜と違つて農薬の濃度が数倍強い。食べるものじゃないから。だから、みんな具合悪くなる。オレも農薬のタンクなんかを洗浄するとき、酒が飲めなくなつたもん。農薬を触つた日に酒を飲むと、酔いが何倍もひどくなるんだ。

中田 その頃は、科学的にも因果関係のようなものをはつきり証明できるものはなかつたでしょうから、当然、医者も原因を特定できなかったでしょう。本能的に「これはおかしい」と感じたのですか。

山澤 農薬を使つて人間でないとわかんねえかも。要するに、田んぼをやつてれば、ドジョウやナマズがいたりイナゴがいるのがわかるけどよ、農薬撒いたら二、三年はピタツといなくなる。遠くからみると、すごいきれいな緑の田んぼに見えるけど、近くに行くと生きものがないんだ。ゾクゾクつてしちゃうの。それくらい人間の力で自然を変えられるわけ。

中田 それは恐ろしいですね。自然が人間にとつて畏怖の念を抱くものであるように、人間もまた、自然にとつては良くも悪くも脅威的な存在なのかもしれません。我が子のアトピーと水田の生き物の様子から農薬の恐ろしさを痛感したことを機に、今につながる無農薬栽培を行ったということですね。

山澤 まずはハーブを作つた。ハーブは原種に近いものだから、すごい丈夫なのよ。



中田 何か目的はあったのですか。

山澤 最初はなかった。ハーブで何ができないだろうっていろいろ考えたんだけど、わかんなくて。そこで動機づけになったのが女だったの。

中田 女？

山澤 そう。先端の女だ。

中田 先端の女？

山澤 うん。ハーブティーとか飲む女。昔はさ、ハーブってえと「沖繩の蛇だか？」って言われたぐれえだもん。

中田 ハーブですね(笑)。

山澤 その程度のもんよ。だけど、レベルの高い女の人知ってたんだ。「香りが素敵」なんて言ってる。それでハーブについていろいろ探したけど何にもない。日本さ本もなかった時代だ。日本人が書いたものは一冊だけ。あとは外国語で書かれた原書だけよ。仕方がないから、それを買って調べたんだ。

中田 なるほど。そこからハーブの研究が始まったんですね。具体的にどういう研究をしたのですか。

山澤 先端の女の研究をしたの。

中田 ハーブではなく？

山澤 そう。正確に言うと、時代の先端の研究だ。

会社を辞めた後、新宿にあるモルモン教のお店で働いたことがあってさ。

中田 なぜそこで働こうと思ったのですか。

山澤 「食」のことを知っていたの。息子のアトピーのこともあったから。その店は肉も魚も使わないレストランで、その代わりグルテンっていう強力粉を練ったものを使うの。おじいちゃんとおばあちゃんがやってんだけど、ああいう人たちって、実は先端にいる人たちなんだ。モルモン教は元々、肉も食わないし魚も食わない。そういうお店が当時、日本で唯一、新宿に一軒だけあったの。

中田 今で言う「自然食レストラン」みたいな感じですか。

山澤 進歩的なね。ああいうところは、女の人ばかり来るんだよ。

中田 美容と健康にいい、と。

山澤 酒もタバコもダメだからね。だからオレ、タバコやめて行ったんだもん。タバコも飲んではいけなくて、いまから何十年前も前だぜ。今は禁煙なんて普通だけども。宗教的に酒もタバコもダメなんだよ。

中田 美容や健康に敏感な女性が集まるのもわかりますね。

山澤 それが先端にいる女の人なの。男はよ、

各論は言うけど総論が言えねえわけ。口ではね。だから、「オレは肉が食いたい」ってことになる。

中田 繁盛店でしたか。

山澤 昼で一〇〇人くらいのとぎもあった。それなりに流行ってたよ。いつの時代も必ず先端の女の人はいるんだよね。ほんと、女つてのは頭にくんだ。だから、オレは女に復讐すんの(笑)。

中田 復讐ですか。

山澤 だって、常に女が先端にいるんだもの。それが気に食わねえの(笑)。心の進歩は常に女からなんだ。

中田 なるほど。男性より先に女性が時代を築くということですか。

山澤 うん。なんでなんだよって思うわけ。

中田 個人的な恨みというより、性別的な、人類的な恨みですね。

山澤 できそこないなんだ、ぼくたちは。がんばっても女にはかなわない。自分を美しくする努力なんて男にはできないからさ。今の若い男は違うみてえだけど。でも、男はどっちも負けんのよ。

中田 「男性より先に女性が時代を築くということですね」
山澤 「できそこないなんだ、ぼくたち男は。男はどっちも負けんのよ」